



南総研だより

1981年 2月

No.3

南総研シンポジウム（報告）

日 時：昭和55年10月18日（土）、19日（日）、20日（月）、21日（火）

会 場：鹿大本部第3会議室・坊津町町営あこう荘会議室・鹿大指宿植物試験場（見学）・開聞山麓香料園（見学）

共催関係：東南アジア史学会

第1シンポジウム：「東南アジア史におけるビルマ」

第2シンポジウム：「海域としての東南アジア世界」

第3シンポジウム：「坊津シンポジウム」

特別講演：「農耕文化史から見た東南アジア」 中尾佐助氏（南総研センター長）

出席者：79名

第1シンポジウム

「東南アジア史におけるビルマ」

本シンポジウムは、ビルマに関する5本の研究発表を行い、東南アジア各国との比較検討を行いながら、ビルマを東南アジア史の流れの中に位置づけようとする新しい試みであった。

「Pyuの古代城趾」

荻原 弘明（鹿大・教養）

Pyu人の城市Halin（現在のHalin-gyi）には温泉があり、塩田があった。Prome（現在の

Hmawza）はデルタ地域と上ビルマを結ぶ要衝の地であり、Beikhanomyo（現在のTaung-duin-gyi）は米作地帯、Maing-maw（Kyaukse）も同じ穀倉地帯、PaganはPyu人の寄港地で、内陸港市という考察から、その後のビルマ史の展開の中でPyu旧趾が深いかわりを持っている事実が判明する。つまり、PaganからはPagan王朝が、Halin近くのShweboからはKonbaung王朝がそれぞれ興起してくる史実がある。Paganの名称の起源はPâli語で「Pyu-game（ピュー人の集落）」と解され、Pyu人の活動の範囲とビルマ人のそれとはほぼ一致する史実を指摘した。「驃」などを記載する漢文史料の重要性についても言及した。これら氏の蘊蓄を

傾けた長年のビルマ研究は重要な問題提起であった。病身をおしての登壇であったが、ビルマ史研究の先駆者として、研究にかける熱情がにじみ出ている。

「上ビルマの村落の構造と秩序」

田村 克己（鹿大・教養）

ビルマにて1年間の住込み調査に基づき、村落社会の構造と秩序をもたらす諸原理を抽出しようとする意欲的な発表であった。外見的に曖昧な人間関係と不明確な「共同耕作」経営が錯綜する中で、村落内では一つの秩序が保持されている。第1に、luggyと呼ばれる年長男子が村内秩序の体現者として存在すること。第2に、儀礼共同組織を支える互酬性、第3に、親しい（khin）の人とそれ以外の人を区別する個人的二者関係、第4に、仏教布施等による一定の範囲の関係者の組織化などの諸原理が挙げられる。現地調査で得られた資料および体験に基づき構築された貴重な報告であった。

「14～17世紀中央ビルマの

ミョウ（城市）経済」

伊東 利勝（学振奨励研究員）

パガン王朝後における中央ビルマ地域の歴史展開を経済基盤から考察しようとする研究であった。地方政治単位「ミョウ」には、領主「ミョウ・ザー」がいて、勢力の拡大のために周辺地域の荒蕪地を拓き、これまでの稲・豆類などに加えて、Wagale種の綿花を個別農民（Athi 階層）がその開墾地で栽培し、綿花が次第に国内市場向けに商品化した。さらにこの綿布がシャン族などの手を経由して対中国貿易（塩・綿貿易）の主要な商品となり、領主は綿花税・織布税で大きな収益をあげた。ミョウ勢力の抬頭はこうした綿業の発展に基づくものであり、領主がこれら富財と私兵をととのえ、

自ら王と僭称して中央政権に叛旗をひるがえした。ところが、明朝下で江南の木綿織物業が興り、中国輸出の激減によりミョウ経済が萎靡し、やがてNyaungyan王朝の中央集権化に容易に組み込まれていくことになった。ミョウの生成・展開を生産基盤に着目しながら論及した興味深い発表であった。

「ビルマ・雲南ルートの史的展開

—唐代を中心に—

藤沢 義美（岩手大・教育）

これまで空白的な部分の多いビルマ・雲南の交易路を中国史料を駆使してその展開を跡づけようとする内容であった。先ず唐代中国側からの入雲路：A建昌路、B南溪路、C黔州路、D歩頭路（安南路）を指摘し、その4ルートがそれぞれ中国側の雲南経営と表裏一体となっている。例えば、貞観末には成都府より大理盆地への最短ルートAが全通したが、吐蕃と唐の和が破れ（671年）、後退する。玄宗代に大理盆地からさらに上ビルマへのルートを目指し、Dが開発されたが、南詔部族の反発を受け、再び転退。唐代後半期には南詔国が上ビルマ地方をも支配し、驃（Pyu）国とも交渉があったという。多年の研究成果の一端の披瀝であった。

「清・ビルマ関係

戦争と平和 1766年～1790年」

鈴木 中正（愛知大・文学）

清はビルマに乾隆31年（1766年）から同34年（1769年）までの間に4回にわたり遠征軍を派遣したが、すべて敗北に終わった。両国軍の間に停戦協定が結ばれ、和平が回復するまでの乾隆帝の怨念と焦燥、それに対してビルマから清へのアプローチ、偽せ清朝使節と偽せビルマ使節の往来などを経て、国交が正常化する（1790年）。乾隆帝とビルマ王ボードーパヤは政治外交

の目的のために両国の辺境地帯の経済的利益を無視して厳しい措置と対決の姿勢を崩さなかった。しかしながら、ビルマと中国雲南の国境地帯にはシャン族系の地方勢力が割拠するが、彼らは中央君主たちの目のとどかないのを利用して偽使節団を交換し、局面打開に成功したという意外な史実を指摘し、これが両国の正常化に結びついたのであった。中間的勢力の介在が1つのクッションとなり、問題解決に導いたが、これらの史実を見抜く慧眼はさすがといわざるをえない。創見的な研究発表であった。

特別講演「農耕文化史から みた東南アジア」

中尾 佐助（鹿大・南総研センター長）

栽培植物・利用植物を手がかりに、農耕文化基本複合の類型を設定し、その歴史展開を促えていくと、東南アジア第1期は根栽農耕文化で、これが中国南部からマレー半島、南太平洋へ伝播、ヤム、タロー、バナナなどを半栽培し、土器はあったが織機はなかった。第2期は雑穀焼畑農耕文化で、その家屋は土間形式であった。第3期はパディ農耕文化で、稲作・杭上家屋・穂刈り・高床倉庫などをもち、歌垣・粒酒がある。日本の弥生時代はこのパディ農耕文化とほとんど同じ農耕文化であり、最初の国家形成が日本および東南アジアで行われるのは、この時期であった。

第2 シンポジウム

「海域としての東南アジア世界」

本シンポジウムは、東南アジアの島嶼部を海域として捉え、沿岸地域形成論の立場から議論した。

「伝統的帆船と海区」

田口 一夫（鹿大・水産）

7世紀頃の木造帆船の建造とその運航技術の問題を取りあげ、東シナ海・南シナ海からインド洋北部における気象・海洋学上の様々な特異性を述べた研究であった。

外洋型帆船の船体構造・艀装では建造材料が強度・耐久性から丸太と木板、帆柱と帆、ロープの問題に言及し、航海技術では指南針と星座の問題をとりあげた。航海環境では、季節風の卓越、つまり冬季の北東風と夏季の南西風の連風と、それによる吹送流（シナ海）およびうねり（インド洋）が帆船航行の大きな障害となり、さらに珊瑚礁の点在も危険であった点を指摘した。9世紀以降のジャンクの活躍は、船体構造とその艀装の優秀性にあり、特に帆船では逆風時にも航行できるという。こうした航海上の技術諸問題を克服しながら、大航海時代を迎えるという明快な考証は大へん示唆に富んだ報告となった。

「東南アジア海域の港市と集落の形成」

岩切 成郎（鹿大・水産）

ジャワ海・南シナ海における大航海時代の港市と村落の形成と変遷について論及した貴重な報告であった。バンタム、パダン、ジャバラなどの港市は河口港・上流域河岸港である点に注目し、沿岸村落が少数民族・漂海民の定住化、時代がさがり華人移住で形成・拡大していく。バジョウ（北ボルネオ）やブギス（東南セレベス）の人たちが蛋民（オランラウ人）とならんで海域社会をつくり、土地非所有その他の理由で杭上村落に住んでいる。さらに、港市の立地が河口港・河岸港である理由は、交易物産が内陸産である経済的条件に加えて、海辺の大部分が泥沙・マングローブであり、清水の欠如・疫病多発という環境条件にある点を指摘し、同時に内陸村よりも全体として貧困である点にも言及し、スライド映写により主な河口港の変遷を紹介した。港市と集落の形成を経済的な視点で捉えた手堅い研究発表であった。

「東南アジアにおける沿岸村落の形成」

片岡千賀之（鹿大・水産）

沿岸域村落の形成過程を農耕地の拡大、漂海民の定住化、水面利用形態の変遷の3視点から考察

した精細な内容であった。19世紀後半以降の植民地支配の強化に伴う平和の確保と輸出農産物栽培の盛行により人口が増大し、過剰労働力が沿岸域低湿地・河川デルタ地帯の開発と村落形成に向けられた。漂海民は漁撈・狩猟・海賊行為により集团的海上生活を送っていたが、植民地支配伸張に伴ない定着し、商品経済の発展で海上交通労働者・農耕民・漁民として沿岸域に定住。近隣の水面は地先総有形態をとり、入会的利用がなされた。1920年代以降対日関係の悪化と近代漁法の日本人締出しのため、漁業政策の採用し、沿岸域村落の住民漁業が小規模ながら興ってくるという。これまであまり知られていなかった沿岸域村落の形成とその展開を限られた文献を駆使し、跡づけた貴重な発表であった。

第3 シンポジウム

「坊津 シンポジウム」

本シンポジウムは、坊津町の諸史蹟を検証しながら、町の教育・文化関係者および地元の郷土史家と合同で、古い時代から中国・東南アジア方面と交易を行ってきた坊津および鹿児島県の歴史的背景を考えようとするものであった。

「交易と坊津の繁栄」

原 多計志

(坊津町長・鹿大名誉教授)

坊津はその昔から「唐湊」と呼ばれ、入唐道として知られており、日本の三津の1つとしても有名で、交易および文化の拠点として栄えてきた。特に鑑真が天平勝宝5年(753)12月20日に「薩摩国阿多郡秋妻屋浦(現在の秋目)に着く」という史実からも、坊津が鎖国まで中国・東南アジア地方と海上交通の要衝であったことが判明する。その後も陰の港として存在していたが、享保年間(1716-35)の密貿易取締りにより終

息する。これら約1000年にわたる歴史的痕跡を近隣の旧家の家系図や所蔵品の中から見つけ出し、報告した。例えば、片浦に住む林さんは、明の某將軍の末裔で、亡命してきたといわれ、今だに守護神娘媽さまを祀っている。泊在住の谷川長四郎氏の祖母があるきっかけから中国式の跪拝をやったのけ、祖先は中国から来たというかすかな記憶を思い出したという。こうした痕跡は唐人町や墓、唐銭・唐カラ船・口碑伝承などで裏付けられている。坊津を中心に交易と地域の盛衰を考察し、併せて坊津の再生を展望した。東南アジア史および海域問題を捉えていく上で示唆に富んだ研究発表であった。

「東西交渉史上における鹿児島県」

永積 昭(東大・文学)

鹿児島県は昔から中国・東南アジアとの海上交通の要衝として知られていたが、この史実をオランダなど西欧の当時の文献から抽出・論証し、跡づけを考究した発表であった。特に16・17世紀、鎖国に至るまでの微妙な東シナ海の情勢は、島津藩を巻きこみ、朝鮮の役の明人捕虜茅国科の本国送還、1601年福州船の来航、明の私船およびタイ・ヴェトナム・カンボジアなど東南アジアの船、それにイギリス・オランダなどの船が頻繁に来航していた。しかしながら1639年の鎖国令により鹿児島県は門戸を閉すが、密貿易は沖縄などを通じて継続していた。1708年日本に潜入したイエズス会宣教師G.B. Sidottiは、護送途中坊津に一時幽閉されていた。当時の西欧の諸文献から鹿児島県の特異な地理的位置と交易の拠点であった事実を浮彫りにした重要な研究報告であった。

シンポジウムの後、午後7時から町営こじま荘で懇談会が開かれ、町の関係者・郷土史家と坊津シンポジウム参加者の間で熱い討論が続いた。

(文責 石沢良昭)

南総研だより No.3 昭和56年2月28日発行

鹿児島大学南方地域総合研究センター

〒890 鹿児島市郡元一丁目21-24 電話 0992(54)7141 (内線)2053